文学のプラグマティクス

T・K・スン

承啓浩

[訳]輪島士郎+山口和彦

勁草書房

Semiotics and Thematics in Hermeneutics

T.K. Seung

訳者紹介

輪島士郎（わじま　しろう）
1936年　石川県生まれ
1963年　ハワイ大学英米文学科大学院修了
現　職　金沢大学教養部教授
著　書　『T. S. エリオットの詩と真実』（高島出版，1988）

山口和彦（やまぐち　かずひこ）
1959年　兵庫県生まれ
1985年　金沢大学大学院文学研究科修士課程修了
現　職　信州大学教養部講師
論　文　「ベックフォードの誠実」
（『仮面とフィクション——東田千秋教授喜寿記念』
山口書店，1987）

文学のプラグマティクス

1989年9月20日　第1版第1刷発行

著　者　T. K. スン
©訳　者　輪島士郎
山口和彦
発行者　石橋雄二

発行所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2-23-15　振替／東京5-175253
電話（営業）03-814-6861　（編集）03-815-5277

＊落丁本，乱丁本はお取替いたします。　根田印刷・牧製本
＊定価はカバーに表示してあります。
＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。
ISBN4-326-80025-9

日本の読者へ

文化の相違はいつでも相互理解の大変な障害となってきました。私自身がそのような障害にぶつかったのは、寄宿学校に入ったときです。学校は旧満州との国境の西端にあった新義州師範学校で、同級生の三分の一、それに一人を除いて先生はみな日本人でした。一九四二年、私が十二歳でしたから、第二次世界大戦のさなかのことです。戦争は日本全体に信じられないような尽忠報国を、また多くの国民から酷(むご)い犠牲をさえもとめていました。私には日本人の先生や級友たちを理解できないことがたびたびありました。その考え方、感じ方があまりにも異質で、しばしば理解に苦しんだものです。きっと、この田舎育ちの朝鮮の少年にとって異質なことでも、当の日本人にとっては当たり前のことだったのでしょう。

一九五四年、イェール大学の一年生として入学したとき、私はまた文化の障壁に行き当たったのです。アメリカの友人たちの考え方と振舞いは、師範時代の日本人の友だちのそれよりもはるかに異質であるという印象を私に与えたのです。しかしこの友人たちから受けた違和感は、第二次世界大戦のような異常な外的環境によって、部分的にも説明がつくものではありませんでした。なぜなら当時の米国は平和と繁栄を享受していましたから。またその違和感を私の未熟さとか田舎育ちのせいにすることもできません。そのころの私はすでに、第二次世界大戦の地獄のような終焉と、朝鮮の日本の支配からの解放を生き抜いていましたし、それだけでなく、祖国の南北分断と米ソ両国による占領、そしてイデオロギーの相容れない二つの政権の擁立を目のあたりにし、私自身は北から南へ脱出、

やがて流血の朝鮮戦争に文民として、後に陸軍士官として参加した経験もあったからです。

これらの大事件の一つ一つが西洋文化の流入によって形成され指令されたものであることがわかり始めて、私は慄然としました。例えば、二つの朝鮮の政治的命運を決定した二つの正反対の政治的イデオロギーが、西洋から導入されたものであることは論を俟ちません。今世紀前半に日本が朝鮮、満州、中国、やがては東南アジアを征服したことも、日本人のエートスに対する西洋のイデオロギーの圧倒的な影響力がなければ、およそ考えられないことだったでしょう。日本の帝国主義と拡張主義は明らかに、世紀初頭のイギリスやヨーロッパの手本によって鼓吹されたものです。要するに、それまでの私の人生に起こった重要な出来事で、東洋と西洋の文化の衝突によって指令されないものを一つとして挙げることができなかった。その点、私の人生は二十世紀の典型的なアジア人のそれと変わるところはなかったのです。

すべてのアジア人にとって、文化の相違は眺めるだけの外的現象であるにとどまらず、格闘すべき実存的葛藤となります。その個人的・社会的実存は東西の文化が争う戦場と化すのですが、この戦場では敵と味方、外国人と現地民との区別をつけることは容易ではありません。アジアにすむ文化的存在としての各個人は、例外なく、多くの異なる文化の複雑に入り組んだ混合体です。ですから、文化的相違を理解することが自己を理解するための、また然るべき文化的文脈において自己の実存的な葛藤を解決するための本質的条件です。

かくして私は異なる諸文化とその葛藤を理解する必要を感じるにいたり、そのような理解を達成するための確かな方法を考案しようとしました。この試みの結果が私の文化的主題論のプログラムなのです。これは操作上の二つの観念からできています。その一つは文化的主題あるいは理想です。すなわち、どの文化も、ちょうど文学作品や音楽作品のように、一群の主題を内蔵しており、それらの主題の相互作用がその文化の歴史を構成する、という考えです。この考えからすると、文化の葛藤や展開は文化的主題の葛藤や展開として分析できます。しかしながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文化的主題の相互作用があるためには文化的文脈がなければなりません。文化的文脈の概念が、私の文化的主題論のもう一つの操作上の観念です。

これら二つの観念を一緒にしてこのように言えます。ある文化的現象を理解することは主題化と文脈化の複合操作を行うことだ、と。主題化とは、そこに係わっている、いろいろの文化的主題を同定し、それらの問題の関係を決定することであり、文脈化は、それらの主題が出現し、発展する文化的母型を記述することです。この複合操作の方法論上の問題は本書で十分に論じてあります。

私の文化的主題論のプログラムが、貴国の貴重な文化遺産と、滔々として流れ込む西洋文化を正しく理解する必要を切実に感じておられる日本の読者にとって有用な道具となればと存じます。この必要においては、日本の読者は東洋的伝統を受け継ぐ他の国の人々と何ら変わるところがないはずです。私たちはみな、西洋を無批判的に受容することによって自分の文化的自己同一性を失うか、それとも西洋を教条主義的に拒絶することによって自分の文化の不毛性を招くか、の板挟みになっております。それは生死の戦いであり、私たちの文化的魂の命運を決するものです。この重大な戦いに勝つには、聖徳太子の英知と英断をもってするしかありません。誠に、太子への恭敬の念をもって、日本の私の読者へのこの御挨拶を結びたく思います。その御事績はこれから地球文化に棲む民として生い育っていく私たちの一人一人にこの上なく畏き訓えであります。

一九八五年十二月二十八日

米国テキサス州、オースティン　T・K・スン

ニュー・ヘイヴンの日々より
オースティンの今日まで
私を教え導いて下さった
I・C・リーブ
G・A・シュラーダー
J・ネフ　に

目次

日本の読者へ……i
序
第一章　テクストと文脈……5
テクストの直観……11
文脈の認識……17
第二章　意図と表現……25
全不確定性……27
部分不確定性……35
公的言語対私的言語……38
意図と慣習……42
第三章　文脈と意味……48
意味論と実用論……52
文脈的媒介……61
第四章　意味論と実用論……67

物語の構造……77
言語学的詩学……90
第五章　実用論の向上……100
使用から行為へ……105
意味対意義……114
第六章　実用論的規範……119
文学における発話行為……120
普遍的実用論対地域的実用論……133
第七章　実用論的機能……144
詩の機能……147
美的機能……159
第八章　主題の企投……171
英雄対聖徒……171
主題の指示……184
第九章　主題的整合性……200
ダンテの叙事詩の主題……201

『神曲』と近代的エートス……211
第十章　主題的伝統……221
解釈学的循環……222
解釈と適用……231
解釈学的経験……236
第十一章　主題の弁証法……247
文化的主題……248
ヘーゲルの主題的三項関係……256
主題の解決……262
主題の帰結……268
主題論的反省……272
原注……279
訳注……295
訳者あとがき……310
参考文献
索引

序

ニュー・クリティシズムが出現して以来、テクストがテクスト解釈のただ一つの焦点となってしまった。われわれはテクストに取り憑かれるあまり、文脈（コンテクスト）の役割を見過ごし、忘れさえして、そのため経験する解釈の不確かさと方法論上の不安は、このところ深刻になっており、それらがニュー・クリティシズム後の鬱屈の新しい症候群になっている。この疾患の治療の一つとして、文脈的理解という問題に改めて注意を促す必要がある。本書はこの促しへの私なりの応答である。

私の目的は、文脈的理解をすべての解釈の営みの基礎として、ずっと以前にドイツ解釈学の伝統の中で据えられた通りに復旧することである。この復興への試みにおいて、言語学や記号論で最近展開されてきた理論が、いろいろの文脈を分節するのに用いることができるものであること、そしてさらに、文脈の分節化がテクストの意味の主題的解明に不可欠であることを示したい。そうすれば記号論と主題論との間に文脈的連関があることを実証することになろう。

この文脈的連関は、テクストの意味（意味対象（シグニフィケーション））を決定するためばかりでなく、その有意性（意義）を評価するためにも本質的である(一)。というのは、テクストとその意味を、すべての意味と有意性の究極の根拠である人間的実在という歴史的文脈の中に定位できるものは、それ以外にないからである。このような文脈的方法は形式主義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

的プログラム、とりわけ今世紀の人文科学を支配してきたニュー・クリティシズムやフランス構造主義のテクスト的方法と対立する。形式主義者たちは一般に、テクスト分析は一切の文脈的な歪みを超える無時間的なパースペクティヴの中でなされうる、という自信をもってきた。だが無時間的パースペクティヴだと自負したものは、一皮むけば共時的なパースペクティヴでしかなかった。そのパースペクティヴからは、彼らの扱うテクストの実存的関わりと歴史的意義とを十分に捉えることはできない。テクストの関連と意義が通時的であり、歴史的であることは枉げようがない。それらは人間的実存と歴史的経験の所産だからである。

テクストが形式主義的分析の共時的な網目を通して濾過されると、その有意性は徹底的に薄められてしまう。共時的なパースペクティヴが、願望から永遠のパースペクティヴと取りちがえられると、意味対象が歪められて、意義の希薄化はいっそうひどくなる。希薄化と歪曲の二つの弊害を避けるためには、われわれのテクスト解釈の経験の中に歴史主義と実存主義を取り込まなければならない。この取り込みがあれば、形式的・構造的分析の偏狭な方法を拡大して、文脈の枠組みの中でテクストの意味を十分に開示するための完全な道具にすることができる。解釈学におけるこの方法論的拡大が、本書執筆の究極的な目標である。

本書の執筆にあたって、多くの友人や同僚から貴重な助けをいただいた。それをみな記すことができないのが残念である。しかし少なくとも次の方々のお名前はあげておきたい。A・マーティニック、H・ホッホバーク、D・フランシス、W・ネザーカット、J・キニヴィ、R・ポルターの諸氏からは、それぞれ実用論、意味論、ホメーロスの叙事詩、ウェルギリウスの叙事詩、ローマの修辞学、解釈学における今日の論点について、A・ムレラトウ、P・ウッドラフの両氏からはギリシア哲学について助言をいただいた。

本書のある部分はすでに次の専門誌に載ったものである。

二　章　*Journal of Literary Semantics*（一九七九）
三　章　同誌、（一九八〇）
七　章　*Philosophy and Literature*（一九八〇）
八章の一部　*Italica*（一九七九）
十一章　*International Philosophical Quarterly*（一九八〇）

最後にあげたものは、発表された時期より十年前、私がミネソタ州、カレッヂヴィルの全キリスト教会・文化研究所で一年間研究したおり、C・リーブ氏に宛てた、一九七〇年九月二十一日付の私信の中で略述した内容がもとになっている。これで明らかなように、氏は私の主題論の企てに深く関わって下さった。そのことは、もちろん美しい研究所と寛大なK・マクドネル所長とともに、いまも感謝とともに思い出される。また、上記の専門誌には、発表した論文を本書に使うことを快く許可して下さったことを感謝する。

本書は、拙著『文化的主題論』を一九七六年、世に問うたときに始まった三部作を締めくくるものである。その本では、主題的意味を解明するのに果たす文化的文脈の役割を立証した。これに続いて、一九八二年の『構造主義と解釈学』では、形式主義やポスト形式主義的な解釈のプログラムに、文脈的考察の無視のゆえに解釈を誤る危険が内在していることを露にしようとした。第一作は建設的な提案であり、第二作は体系的な批判であった。両者とも一組の理論上の仮定と方法論上の立場を前提としている。これらの仮定と立場はこの第三作に詳述してある。

私がこの連作に着手したのは一九六九年であった。それからの十二年間、次の諸機関から惜しみない補助金を受けた。高等教育宗教協会、米国学会協議会、全国人文科学振興財団、テキサス大学オースティン研究所。ここに記して感謝する。この研究所のW・リヴィングストン所長の惜しみない援助、W・コンロン氏の事務上の助力、T・

イングマン氏の編集上の助言に対しても心から感謝を申し上げる。

最後に、私の覚束ない計画を終始しっかりと支えて下さった、私の所属する学部の歴代の学部長、J・R・シルバー、S・N・ワーボウ、R・D・キングの三氏には深甚なる感謝を捧げたい。この三部作は、この方々が私の連作計画を深く理解して、その成果に大きな信頼を寄せて下さったことに対する一連のささやかな感謝のしるしにすぎない。このように、私がこの連作に費した十二年は、結局、謙遜と理解とを学び、訓練される一連の教程であった。

第一章　テクストと文脈

テクストは客観性をもつ、という考えは、ニュー・クリティシズムの展開の中心的な前提となってきた。この前提が、過去十年の間に、読者反応批評を唱える人たち(一)からの高まる批判にさらされている。スタンレー・フィッシュやノーマン・ホランド、そのほか大勢が、読者の反応と経験の役割を引き上げただけでなく、読者の主観的意識こそテクストそのものを構成する唯一の能作（エーヴェンシー）である、と公言している。解釈的綜合という主観的作用を離れては、文学のテクストは一切の意味と意義を欠いた「乾燥させた木材パルプの上に、カーボン・ブラックの斑点が一定の形状をとったもの」(1)にすぎない、とホランドは主張する。テクストのテクスト性は、読者がその文字を認識し、その意味を解釈する程度に応じてその分だけ確立される。しかし、読者のこの認識と解釈の作用は、もっぱら自分の記憶や恐怖、幻想や願望、期待や不安といった主観的心理状態によって決定される(2)。この解釈的綜合がなされるまではテクストは白紙状態（タブラ・ラサ）にすぎない、というのである。

ホランドの立場の本質的な特徴は、その徹底した主観主義である。客観的なものを、主観的意識の作用にとって基本的与件であるとして受けいれることは、彼にはできない。この立場から、ホランドがフィッシュをたしなめたことさえある。フィッシュが初め、読者がテクストに働きかけることができるのと同程度にテクストも、みずから、読者に働きかけることができる、と想定していたからである(3)。このフィッシュの想定は、彼がテクストとその

作用の客観的存在を信じていることを、図らずもあらわしてしまった。ホランドは、そう信じることの単純さを示そうとして、テクストがみずから読者に作用するのではない、読者自身により認識され解釈されることによって初めて作用するのだと指摘する。しかしフィッシュはすでに自分の立場を修正して、操作されるテクストそれ自体、読み手の解釈的戦略によって構成されることを認めている(4)。

読者の主観的綜合、という全能かつ全構成的作用を離れては、テクストは現実に存在すらしない。テクストがテクストとして構成され働くことは読者の主観的領域の内側でのみ起こる、とするこの立場をテクスト的主観主義または独我論とよぶことができるだろう。テクストの客観性が読者の主観性にのみ込まれてしまっているからである。このテクスト独我論の精神は、ホランドの多くの著作の一つ『人の中の詩』とか、フィッシュの論文の一つ「読者の中の文学」などの題名に図式的に表われている(5)。文学作品のテクストは、それを読む者の主観性のうちにのみ存在して働く、というのがテクスト的主観主義の中心的な信条である。

テクスト独我論者であることには、何ものにも比べられない利点がある。すなわち、テクストを誤って読んだり解釈したりするのではないか、という不安に苦しむことが絶対にない。というのは、読者が読むテクストと読みとる意味は、すべて、読む、という正にその行為によって構成されるからである。読みの行為とテクストとの間に介入してくる外的な制約は一切ありえない。フィッシュが読む行為一つ一つが書く行為である、と公言するゆえんである。テクスト独我論の世界にあっては、読むことと書くことは同一の行為である。宇宙という書(ふみ)をつくる神は自ら書いていることをのみ読んでいる、と言われることがあるが、テクスト独我論者はそのような神的主体の特権をすべて享受するわけである。

読む主体は全能である、といって、発見したばかりの力を誇る読者中心批評の論者がいる一方で、テクストの客観性を求めながらも圧倒的な無力感にとりつかれたニュー・クリティシズムの末裔もいる。ハロルド・ブルームは

絶望のあまり、「解釈などない、あるのは誤解ばかりだ」と言っている(二)。同じ絶望と無力の調子で「何ものも『ハムレット』の的に当たらない、正鵠を得ない、当の戯曲をのぞいては」とヂェフリー・ハートマンも共鳴する。そして彼はわれわれの解釈の企てをヤコブと天使との組打ちに比べるのである(三)。たしかに、読者のちっぽけな主観的能力とテクストの永久に捕え所のない客観的実在性との、比較を絶した格差を記述する痛切な類比ではある(6)。

ヤコブと天使との格差は紛れもないが、それにしても、組打ちの類比はハートマン自身の疑心暗鬼の取組みを描くには余りにも荘重だし、また甘すぎる。ヤコブには少なくとも両手で天の使いを摑んでいるという手ごたえがあったが、ハートマンやその仲間の懐疑論者にはこの確かさがまるでない。テクストの客観的実在と取組んでいるという彼らの意識すら、主観的幻想にすぎないのかもしれない。というのも、われわれがテクストの客観的実在との接触を確立した、と証明する確かな方法などないからである。ハートマンはこの自信喪失の悲哀をこのように記述する、「私には天使の格闘が見える（〈夜が明けぬまにぜひわたしを祝福して下さい〉）(四)、天使には羽根が多いが鶏鳴にみると羽根が散らばっているだけ。ただのニワトリだ(7)。」天使との組打ちだとわれわれが思い込んでいるテクストの実在との格闘は、実は主観的観念という庭にバタバタしているニワトリとのつかみ合いにすぎないのかもしれない。

読者はテクストまで手をのばし、それを客観的実在としてつかむことは決してできない。テクストの客観性の領域は、読者のとどく範囲をはるかに超えた幻の国である。このように考える立場をテクスト不可知論と名づけることができよう。テクストの客観性は読者の主観性から全く疎外されてしまった。この疎外感にさいなまれ、不可知論者は自分と彼岸のテクストとの間に拡がるばかりの深淵を見て、腕をこまねくばかりである。この不可知論者の気分をブルームは「われわれと対象との間に、あるいは、自我と他我の間に、呆然と立ちすくむような深淵が横たわっている」と表現している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com